部落問題文芸・作品選集

第33巻

佐々木味津三著

風雲天満双紙（上）

世界文庫版

部落問題文芸作品選集　第三十三巻

昭和五一年八月二十日発行

発行者　松本富夫

発行所　株式会社世界文庫

東京都目黒区洗足二―一二―一五〒152

電話〇三（七一六）六一五一（代表）

（七一三）九二四四

振替　東京　四―七八四九八番

定価は箱帯に表示

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

風雲天満双紙　上巻　目次

雨中の死に首　七
瓢簞の謎　三五
決死の對決　六五
渦卷く戀　九四
怪しの女行者　一三七
怪教詮議　一四五
長蛇を逸す　一七〇
黑い影　一九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

—挿繪並裝幀—

河野通勢

風雲天満双紙　上巻

雨中の死に首

一

――第一雨からしてがしよぼしよぼと、音をきくさへ鬼氣を催す春先の淫ら雨でした。その上濡れ毛にでも障るやうな、いやに生あッたかい雨風が、すわりすわりと襟首を不氣味に撫でるのです。しかも刻限がまたいやなことに丁度暮れかゝつためそめそ時で、あまつさへ場所がまた大阪名打ての不氣味な天滿橋の上でした。――尤も橋の北側は天滿橋通りの繁華な町家つゞきでしたから、こゝに不氣味な箇所のあらう筈はないが、名打ての氣味がわるいところと言ふのは、その反對側の橋の袂に、ぬッと枝を垂れてゐる因縁柳のことで、いつぞや按摩がその柳の枝で首をくゝつて以來と言ふもの、奇態にその古柳のところから大淀の流に入水する者があつたり、或は同じやうに枝へぶらりとやつたり、または新身試しの辻斬りに出會つたりするものが續々として絶えなかつたものでしたから、誰言ふとなしにこれを因縁柳と稱して、大ていの者がこゝは目をつむつて駈けぬける評判な場所でした。

だから、よし異變がなかつたにしても、折から生憎のしよぼしよぼ雨と言ひ、場所のいやな橋際と言ひ、時刻のあまりうれしくない暮れ六ツ刻と言ひ、それだけでもう大方膽が冷えるだらうと思はれるのに、何と言ふまた不氣味な眞似をしたものでしたらう！――憤恨あつてのことからか、それとも只のいたづらからか、その因縁柳が丁度長い枝をたらりと垂れ下げてゐる眞ん下の、ぺつとり雨に濡れた橋の欄干の上に、紛れなき人間の生首がによつきりと一つのッかッてゐたのです。しかもぎよッとすることにはその生首が、ねつとりと蛇のやうに髪の毛を頬の邊に卷きつけて、まだ眞新らしい菅笠をしつかりと冠つたまゝでしたから、見つけたものがへたへたとそこに、早腰を抜かして了つたのは當然なことでした。

しかし幸ひなことに、その發見者はどこかそこら邊のお屋敷にでも勤めてゐるらしい仲間體の者でしたから、早腰を抜くは抜いても腰の木刀の手前、いくらかまだ正氣なところがあつたと見えて、ろれつは怪しい乍らもとにかく聲の出た事が天晴れでした。

「お、おうい！　で、でたぞッ。出たぞッ。首の幽靈が出たぞッ。」

「ちえッ、うすみッともねえ悲鳴をあげるなよ。首の幽靈が出たんだつて？　どんな奴かお目にかゝらうぢやねえか。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その聲をきゝつけて、向ふ側を通りすぎようとしてゐた半天着か、大きに剛膽さうな事を言ひ乍ら、のこのこ近よつていつたやうでしたが、とかくこう言ふ風な大口を聞きたがる奴に、實は臆病者が多いとみえて、ひと目ひよいと見ると一緒に、げェッと言ひ乍ら、ぶくぶくと水泡を吹いて、口程にもなく顫癇を起して了ひました。

けれどもその二人の騒ぎ聲が、送られるともなく風に送られて、天滿筋の町家つゞきに、傳はるともなく傳はつたものでしたから、ひとり駈け出し、三人飛び出し、そしてこれが八人十人の烏合の衆乍ら、ともかくも一つの集團を造ると、恐さがその頭數だけに細く割られて行くと見えて、中のひとりが傑へ乍らも氣轉のいゝ事を叫びました。

「誰か早く龕燈をもつておいでよ。」

「龕燈はねえが、ここに提灯があらあ。」

「なほいいや、ちよッくらこっちへ貸してみな。」

聲から聲が傳はると、次第にまた度胸も据つて行くと見えて、遊び人らしい風體の年輩なのが、群集の力をたより乍ら、灯りをとつて首の近くへさしつけました。

しかしそれと同時に、灯をつきつけた本人は元よりのこと、さしのぞいた群集が一齊にぎ

よッとあとずさりをして了ひました。――それも亦道理でした。首は實に三十五六の女だつたからです。しかもどうした事か、一滴の血のしたたりも見えなかつたので、それだけに凄さがまた數倍でした。

「畜生、むごい眞似をしやがつたな。どこかの極道侍めが、いたづらしたに違げえねえぜ。」

「でも、辻斬りにしちや、血の出てゐねえのが不思議ぢやねえか。」

「乞度こう言ふ流儀があるんだよ。名人が斬るとつま突く迄首がおちずにゐるつて言ふ位えなもんだからな。血を出さねえで斬る位えは、雑作のねえことに違げえなからうさ。」

おッかなびつくり乍らも、しきりとわいわいやつてゐたやうでしたが、と――、中のひとりが意外なものをでも見つけたかのごとく、頓狂に言ひました。

「おや！　な、おい橋場の親分、その笠の表にをかしな文句が書いてあるやうぢやムんせんかい。」

言はれて件の遊び人らしい風體の男が、再び灯りを恐々とさしつけてゐたやうでしたが、いかさま菅笠の上には、たどたどしい筆蹟乍ら、次のごとき奇態な文句が書かれてありました。

――この者を死に至らしめた下手人は、おほさかよりきしうのうちにあり。

誰の目にも書かれてある文句は、これなる女を殺した下手人は、大阪から紀州の間にありと讀まれましたので、忽ち群集の間に十人十色のざわめきが、潮のごとく擧りました。

「人を喰つた斷り書ちやムんせんか。斬つた野郎がわるふざけに、書きのこしておいたんでムんせうかな。」

「まさか！　自分で斬つて自分がわざわざ居所を知らせる阿呆もムんすまいよ。これぢや、大阪から紀州の間を探しに來いと言はぬばかりの文句でムんすからな。」

「いいえ、それが屹度この下手人の野郎の手なんですよ。こう書いておいて、捕り手が紀州路に追つ駈けていつた頃は、野郎め方角違ひの有馬の溫泉あたりで、ぬくぬくと臍を溫めてゐるかも知れませんぜ。」

「そんな馬鹿な事があるもんですかい。どれもこれもみなさんの御評定は見當違ひですよ。屹度こりや、辻斬りする現場を誰かほかに見屆けてゐた奴があつて、そいつが書いておいたものに違げえムんせんぜ。な、ほら、それが證據にや、あとからこの文句を書き足したとみえて、墨筆が雨で流れてゐるぢやムんせんか。思ふにこの文句を書いた奴あ、下手人の野郎の居どころは勿論のこと、どこのどいつだか顏も見知つてゐるに違えムんせんぜ。」

がやがやとありッたけの智慧を絞り乍ら、人々が、夢中になつて、それぞれの解釋を下し合つてゐるその最中でした。足音もなく歩み來たつて、ぴたりと群集のうしろに立ち止まり乍ら、おやッと言ふやうに烱々と、鋭く眼を光らした二人の人物がありました。

二

——ひとりは紋付羽織、袴大小、それから足駄に蛇の目の工合、一見したばかりでもそれと知られる身分ありげな風采で、何のゆゑにか面は深々とおしのび姿の頭巾で包み、肩のあたり腰の邊の肉付、見るからに秋霜烈日とした痩せ形のお侍でした。そしてあとのひとりは、どうやら件のお武家のお伴ででもあるらしく、まだ二十七八歳の心様も慧しげな若侍でした。

二人は、がやがやと立騒いでゐる群集のうしろに足音もなく近寄つて、ぎろりと鋭く目を光らし乍ら、欄干の上の代物を見眺めてゐたやうでしたが、若い方がふりかへると、命令を待つかのごとくにそつと囁きました。

「いかゞ致しませう。念のために打ち調べませうか。」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.